

して推薦したり、北里柴三郎の伝染病研究所の設立に協力したり、明治六年には慶応義塾医学所を開設したりして、日本の西洋医学発展に大いに貢献したことを、本書は余すことなく記しており、医者のみた論吉像によく迫っており一気に読める好著である。

最後に、慶応義塾の北里講堂の二階の会議室に掲げられている、論吉の医者に贈るための、七言絶句の漢詩について触れている。その意味するところは「病気を治すのは自然（神）であるなんて思ってくれるな。毎日勉強している医師の自分が治してやるとおもいなさい。自然が治すんだから、ただ見ていればいいということではない。患者を見たら千里の先まで、手の裏まで見通し、孫の手のように、患者のかゆいところの隅々まで手の届くような、そういう医者になりなさい」。

(川島 真人)

(中央公論社・東京都中央区京橋二一八一七、電話〇三三三五六一一四三一、一九九六年十月、新書判、二三五頁、七二〇円)

### 精神科医療史研究会編集

### 『長山泰政先生著作集』

「精神病患者及び精神異常者を精神病院外の自由なる天地で医学的(精神病的並に精神衛生学的)或は社会的見地より、患者の生活状態を出来得る限り侵害せずに、各人に適した方法で保護する」のが「院外保護」という(長山泰政「独逸公立精

神病院に於ける精神病患者の看護並に保護事業)。ドイツ語の *Offene psychiatrische Fürsorge* を訳して「院外保護」と呼んだ。この名称を作り、日本で初めて院外保護を実施した先駆者が、精神科医長山泰政(一八九三—一九八六)である。

精神科医療史研究会編集の『長山泰政先生著作集』によると、長山は府立大阪医科大学(今の大阪大学医学部)精神病学教室に所属していた一九二九(昭和四)年四月、和田豊種精神病学教授、長崎仙太郎薬物学教授らとヨーロッパ視察の旅に出た。ベルリンに着くと和田教授から「君はドイツに残って研究するように」と言われ、長山はドイツに残り、ミュンヘンで精神病理学を研究。たまたまハンブルグで精神病理学講習会に出席し、シモンの「最新の作業療法」、コルプの「精神病患者の院外保護」の講義に感銘し、ドイツ国内一九カ所の公立精神病院を数カ月間、詳細に視察調査した。帰国後は大卒に戻らず、大阪府立中宮病院に勤め、作業療法、院外保護、家族看護を実施し、海外の事情などを記して論文を次々と発表したが、神経学雑誌には受理されなかったという。(日本作業療法士協会精神科作業療法基準委員会「長山先生訪問記」)

著作集の第一部署作では、「欧州精神病院に於ける作業療法」などの論文、随筆、滯欧日記など二十篇余りが掲載されている。長山は論文「精神病患者の院外療護特に院外保護に就て」で、ドイツで広く行われている病院外保護の推進と、保護医と保護員のきちんとした養成を訴えている。保護医は精神病患者の院外保護で、患者を指導・監督・保護する精神科医

であり、保護医を補佐するのが保護員である。この論文では「院外保護に対する異論及び疑惑」にも言及し、院外保護が「社会の公安及び道徳等が頗る危険となる」という意見に対し、このような不安を取り除くのが院外保護の任務であると明言している。

第二部の「長山泰政先生の生涯とその人」では、精神科の医師や親族など縁の人々が長山の思い出と業績を語っている。長山は、論文の中で保護医は病院内に居住するか、保護区域内主要地に居住することを主張したように、勤務した中宮病院から二キロ以内の地に住居をかまえ、終生そこに住んだ。そして自宅を開放し、患者さんや病院職員たちと家族ぐるみで交わったという。

医学に興味をもつ者には、長山が書いた『精神衛生』中の「精神衛生の歴史」と、第三部「作業治療・院外治療の歴史」で岡田靖雄氏が書き下ろした「日本での精神科作業治療ならびに精神疾患患者院外治療の歴史（敗戦前）」が参考になる。

（藏方 宏昌）

〔長山泰政先生著作集刊行会・〒180東京都武蔵野市吉祥寺本町二一四一五ピア吉祥寺三〇二号精神科医療史研究会内、一九九四年一月二五日、B5判、三九四頁、非売品、会員頒布一〇一六、〇〇〇円 取り扱いは精神医療史研究会、振替口座〇〇一四〇一二二五二二五〕